

一首の独立性 黒岩剛仁

八月号で「作品の背景や情報」について書いた。それは主に読み手側から考えたわけだが、今月は作り手の側から記す。短歌を作って提出するとき、歌会や全国大会のように一首単独でない場合は、連作として作ることが多いのではないか。その折、連作中の一首の独立性をどう考え、確保するかである。例として「短歌往来」九月号の特集「子育て&子供のうち」を取り上げてみたい。

・取り戻せない時間を詰めて子は巡る生まれた町の郵便配達

佐伯 裕子

一連には、〈昼に寝て夕べに起きる青年をいくたびもいくたびも叩き起こしぬ〉という一首があり、「何でも話してくれていた口」とも詠まれているので、この青年は引きこもりのような時期があったのかとも思われるが、掲出の歌だけではそれは分からない。しかしながら、それでいいのだろう。生まれた町で郵便配達に励む青年の鞆か籠には、「取り戻せない時間」が詰められている。それがどのような時間であるかは、読者の想像に委ねたのだ。

・揺れ、すがり、諦め、肝を削ぐような感情 今夜も娘とねむる

鈴木 英子

この歌には、〈驚かない落胆しない騒がない そういう母にまだなる途上〉という歌が詞書として添えられており、前後の歌からも娘さんが障害を持つていることが分かる。ではあるが、この

一首には状況説明抜きで娘と隣り合って眠る折の作者の感情だけが表出される。それが結果として読者に迫ることになると、作者は確信しているのだ。

・虎のごとわれに吼ゆる子なお清らしんに童子の訴えありて

辰巳 泰子

一連五首の冒頭の歌である。もちろん、この一首目の段階では、読者にはまだ何故この子が反抗的な態度をとっているかは明かしていない。ただ、母としての視点から詠み、そこに切実な想いを込めたことは充分読み手の側に伝えられている。

・オーロラを動かすマウスに触れて子はひとり極地に立つごとく冷えて

大口 玲子

やはり、前後の歌や添えられたエッセイから、学校に行かなくなった息子への母の想いを、「ひとり」「冷えて」の語に含ませたと読めるのだが、この一首だけでも、スクリーンか画面に映るオーロラを一心に操る繊細な少年の姿は髣髴とするのではないか。

・今をつねに流されながら進みゆけば子の成長は杭のごとしも

花山 周子

ここでは、子の成長を通して、母自らの生き方が見つめ直されている。「流されながら」と「杭」の縁語が上手い。

・振り向けば子の通話する低きこえ夏の井戸からつぶやくような

富田 睦子

・責任を追及し合う妻とわれ「ずうずうしい」と子の言い初めて

屋良健一郎

・すずめ蛾のやわらかき腹わが知らぬ少女となりて子の夏は過ぐ

奥田 亡羊